

〈新鋭書下ろしSFノヴェルズ〉

風にブギ

岬 兄悟



早川書房

新鋭書下ろしSFノヴェルズ
風にブギ

昭和五十八年二月二十日 印刷
昭和五十八年二月二十八日 発行

定価八八〇円

著者 岬 みさき 兄悟 けいご

発行者 早川 清

発行所 株式会社 早川書房

郵便番号 一〇〇一

東京都千代田区神田多町三ノ三

電話 東京 (三三) 二五二 (代)

振替番号 東京・六四七九番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

0191-94000-6943

検印廃止

〈新鋭書下ろしSFノヴェルズ〉

風にブギ

岬 兄悟

早川書房

風
に
ブ
ギ

目次

第一部	幻惑されて……………	7
第二部	ふたりでお茶を……………	73
第三部	ナイト・ライフ……………	151
第四部	風にブギ……………	223
解説	……………	291

第一部 幻惑されて

ス ス ム

『沢野進。二十四歳。独身』

ススムは書き損じの原稿用紙の裏に書いたメモを見つめ、八回目の溜息をついていた。

机の左側にある本棚の上のデジタル・クロックを見た。午後二時二十二分を示していた。不思議なことにススムが何時かと思つてデジタル・クロックを見ると、なぜか同じ数字がずらずらと並んでいることが多い。なにか意味があるのかもしれないし、ないのかもしれない。

ススムは二秒、三秒……と変化してゆく数字をしばらく眺めたのち、黒のサインペンを手にした。キヤップを机の上に投げ捨て、メモに書き加えた。

『身長百七十センチ。体重五十五キロ。長髪。美男子』

しばらくメモを見つめ、ふいに椅子から立ちあがった。——部屋を横切り、壁に掛かっている鏡の前に立った。

足もとがちよつと切れるだけで、ほぼ全身が映る長方形の鏡の中の自分を見た。

ウォッシュアウトのスリム・ジーンズに、白のTシャツの両袖を肩までまくりあげている。Tシャツの胸にはオレンジ色の文字で英語が書かれてある。

ススムは鏡に向かって眉根を寄せ、右手で前髪をかきあげた。体全体を少し右に向け、顎を引く。自分が一番気に入っている角度なのだ。

しばらくそのままでいたが、ぼつりと小さく呟いた。

「昔は美少年だった……」

肩を落し、再び部屋を横切って椅子に座る。

メモを手にして眺める。十分ほど見ているとメモの中に自分の姿が美化されて浮かんできた。

「ん、やっぱり、おれしかない」

うなずき、サインペンを手にした。ちょっと考えてから書き加える。

『アルバイト。酒。バンド。女』

ススムは再びメモを手にし、つくづく眺める。女という所をじっと見る。さらに十分が過ぎた。

過去のなにごとかの記憶を回想したススムはメモをぐしゃぐしゃと丸めて床に投げ捨てた。唇の端がひきつっている。

椅子から立ちあがり、ステレオのスイッチを入れFM放送を流したが、暗い演歌が流れていたのですぐにスイッチを切った。次にステレオと反対側の壁の前に立ち、外国人の女性のヌード・ポスターを半分口を開けてじっと見つめた。たつぷり二分間眺めた。気分が落ち着いてきた。

再び机の前に戻り椅子に座る。なぜか鼻の穴をはじりだした。小指に付着した物を寄り眼で見つめ、油っ気のない髪の毛をかきむしる。

机に突っ伏し、そのまま動かなくなつた。

五分後、顔をあげた。

「若者には明日という日があるのだ」

椅子から立ちあがり、机と反対側の壁に寄せて置いてあるベッドに、ぐったりと仰向けになった。仰臥したまま天井を見る。

「ちきしょう……」

ススムは彼女のことを考えていた。頭の後ろに両手をやり、ソフト・フォーカスに包まれた彼女の顔を思い浮かべた。

天井を見あげたまま彼女の名前を少女マンガの主人公のように小さく呟いてみた。そして誰かに聞かれなかったかと、あわてて身を起こして部屋の中を見まわし、女子学生みたいに独り顔を赤らめた。

俯せになり、水色のクッションに顔を埋めた。

クッションに顔を押しつけたまま、もごもごとまた彼女の名前を二回言い、両手両足をばたつかせはじめた。耳が赤くなっている。

ススムはクッションを抱きしめ泣きそうな表情をしていた。おれはなさない、と確信をもって思った。

ススムはそれから一週間、毎日同じことをくりかえした後、ようやく原稿用紙に文字をシャープ・ペンシルで書きだした。

沢野進はアパートのドアを静かに閉めた。

鍵を掛け、ジーンズの右前ポケットに落した。

右手で長髪をかきあげ、暗い鉄製の階段を足音がしないように降りる。

最後の三段めで進の左足のサンダルは、なにかぐにやりとした物を踏んづけてすべった。

「うわっ」

進の体はL字型に一瞬宙に浮き、そのまま落下して尾骶骨をいやというほど階段の角にぶつけ、尻で一段ずつ下までずり落ちた。落雷のような大音響が響いて二軒ほど先の家の犬が狂ったように夜空に向かって吠えだした。

進は階段の下のコנקクリートの上に呆然としばらく座っていたが、尻を押さえながら立ちあがった。

「ちきしょう」

真暗な階段を睨みつけるように見あげ呟いた。

階段を照らす螢光灯は三カ月ほど前から切れたままだった。進は管理費を取っているアパートの大家を呪った。いったい、なにを踏んだのかは判らない。

進は路上にて、自分の部屋の窓を見あげた。進の部屋は二階の一番端である。窓は机のスタンドの明りがカーテンを通してぼんやりオレンジ色に光っていた。

街は寝静まっていた。

午前二時の住宅街の道にはねっとりとした生暖かい風が吹き渡り、Tシャツ一枚しか着ていないのにひどく蒸し暑い。

進はひとつ溜息をつきサンダル音をさせながら、街燈に照らされた青白い道を歩きだした。

こういう生暖かい晩は泥棒や性犯罪者などがうろつきまわることが多いのだろう。そう思った。

だが、むろん進はそのどちらでもなかった。進は煙草を買いに行こうとしているだけなのだ。

スーパーで買ったやわかなサンダルのパタパタという音をさせて道を左に曲がる。

一番近くにある煙草の自動販売機までかなりある。早く買って早くアパートに戻ろう、と進は思っていた。

住宅街を抜けて、閉まったシャッターが道の両側に続く夜の商店街に近づいてきた。

前方右手にこうこうと明りが点いた店が見え、進はハッとした。だが、すぐに納得した。二十四時間営業のコインランドリーの明りなのだ。

そのコインランドリーの前を通り過ぎようとして進は立ち止まった。

中に娘がいた。

肩までの髪の娘が、こちらを向いて椅子に座り、ウォークマンのヘッドフォンをして、マンガ雑誌を読んでいた。黄色のTシャツにスリム・ジーンズ。小柄な娘だ。座った丸椅子の右横に紙袋が置いてあった。

横開きのガラス戸はきっちり閉まっていた。

ふいに娘がマンガ雑誌から顔をあげてガラス戸越しに進を見た。大きな眼で立ち止まっている進をじっと見た。

かわいい娘だな、と一瞬思ったが、進はあわてて視線をはずし、先へ歩きだした。

しばらく行くと左手にやっと煙草の自動販売機が見えてきた。シャッターの閉まった薬屋の横にある。明るい家族計画の販売機も傍にあった。

進は自動販売機にたどりつき、ジーンスの左前ポケットに手を突っ込んだ。五十円玉が一枚と十円玉が三枚現われた。

あわててもう片方のポケットを探り、尻ポケットも両方探った。金はそれだけだった。

進は自動販売機の煙草の見本を見つめ、左掌ののっている何枚かのコインを見つめた。

進は肩を落して道を戻りはじめた。金が落ちていないかと路上を見回しながら歩いたが、落ちて
いるわけがない。

おれは阿呆だろうかと心の中で呟きつつ、さきほどのコインランドリーの前を通った。

なにげない風をよそおって中を見た。——さっきの娘はいなかった。

進は立ち止まり、さらに近寄ってガラス戸越しに中を覗いた。

娘はいなかったが、正面にある乾燥機のひとつが回っていた。丸窓の中で服がとびはねるように
回っている。

ガラス戸を開け、進は中に入った。

中はやけに白々と明るく、ひどく蒸し暑かった。回っている乾燥機の音だけがしていた。乾燥機
が回るたびにカラncカラncと小さな音がしているのは、出し忘れたコインでも洗濯物から落ちたの
だろうか？

あれが百円玉だったら手持の金と足して煙草が買えるぞ、と進は思った。

進は音をたてて回っている乾燥機を見つめ、コインランドリーの中を見まわした。さっきの娘は
どこにもいない。

けっこう広いコインランドリーである。

進は友人から譲ってもらった年代物の古い洗濯機があるので、ここへはまだ来たことがなかった。

前に住んでいたアパートの頃はよく銭湯のコインランドリーを利用したものだ。

床にいくつか丸椅子があり、そののひとつに服がたんで置いてあった。その上にウォークマンとヘッドフォンがのっている。右横の床には空の紙袋が置いてある。スヌーピーの絵が描かれた紙袋だった。

進はそれらを見て眼をしばたいた。

丸椅子にのっている服は、ジーンズと黄色のTシャツなのだ。さっきの娘が着ていた物にちがいない。ウォークマンもだ。

すると彼女はここで着ている物を脱いだのだろうか？ いったいどういふつもりなのだろうか？ 着ていた物も洗うつもりなのだろうか？ 彼女はどこへ行ったのだ？

黄色のTシャツの下に薄いピンク色の物がちらっと見えた。進はTシャツをつまんでまくって見た。

「あ」

あわてて進はTシャツを被せた。

薄いピンク色の物は、ティッシュのように小さくシヤクシヤに丸まったショーツだったのだ。

進は顔を赤くした。

前方の回っている乾燥機を見た。右横の壁に張り紙がしてある。

『女性の方、下着盗難に注意してください』

と赤のマジックでくっきりと書かれていた。

進はドギマギした。いったい、さっきの娘はここで服を脱いでどこへ行ったんだ？ まさか全裸で夜の街中を歩きまわっているわけではあるまい。進の頭の中にその情景が浮かんだ。